

2007 Joint Conference on Satellite Communications (JC-SAT 2007) 報告

電子情報通信学会 衛星通信研究専門委員会 委員長
 茨城大学工学部メディア通信工学科
 梅比良正弘



2007 Joint Conference on Satellite Communications (JC-SAT 2007: 衛星通信に関する日韓合同会議 2007)は、沖縄県那覇市の沖縄県青年会館で11月1日～11月2日の2日間にわたって開催された。本会議は2000年から電子情報通信学会衛星通信研究会と Korea Society of Space Technology (KOSST)が共同で主催し、IEEE VTS Japan Chapter、AIAA Japan Forum on Satellite Communications、韓国 KARI、韓国 ETRI、韓国 KT、韓国 SKT、韓国 IITA が協賛する衛星通信に関する日韓ワークショップとして、日韓で交互に開催しており、今年では第8回目の開催にあたる。

今年で交互に開催しており、今年では第8回目の開催にあたる。

今年の発表件数は、基調講演2件を含む37件であり、例年を上回る盛況となった。内訳は韓国:19件、日本:17件、台湾:1件、聴講を含む参加者数は51名であった。

会議の冒頭、筆者及び KOSST 会長の Inha 大学 Jae-Moung Kim 教授による開会挨拶に引き続き、2件の基調講演が行われた。日本側からは H-II B プロジェクト・ファンクションマネージャである JAXA 有田誠氏が「H-II A/B ロケット開発の現状と将来」と題して講演し、韓国側からは ETRI (Electronics and Telecommunication Research Institute) 無線・放送研究部門ディレクターの Ho-Jin Lee 氏が「移動衛星通信及び放送に関する標準化動向」と題する講演を行った。

一般公演では、韓国からは ETRI の研究発表が多数あり、アクティビティの高さをうかがわせた。昨年度数多く行われた COMS (通信及び海洋、気象観測の多目的衛星) 搭載機器に関する発表は一段落し、WiBro など地上方式と組み合わせた通信方式技術や、地球局機器に関する新たな検討についての発表が増加した。一方、日本からは ETS-VIII やピコ衛星等を用いた実験結果を始め、マルチキャリア変復調の応用等に代表される信号処理技術、さらに災害対策やデジタルデバインド解消を狙ったアプリケーション技術等が発表され、日韓の研究者による活発な質疑が行われた。

初日の夜に開催されたレセプションパーティでは、沖縄の地元料理や泡盛が振る舞われ、韓国と日本の衛星通信研究者が大いに親交を深めた。

JC-SAT 日韓委員会は、次回 JC-SAT2008 を韓国・釜山を開催予定地とすることで合意した。また、今回から中国を含むアジアからの論文募集を開始したが、より効果的なプロモーションを行うため、日韓双方の定期的な連絡を行うとともに、各国にコーディネータを配し、積極的なプロモーションを進めることを確認した。



▲レセプション会場にて